※文字の大きさは MS ゴシック ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、適宜文章中に挿入してください。各項目の枠の上下幅は変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

※事務局記入欄
No.

【様式２】

エントリー名：　愛媛県砥部町立麻生幼稚園

活動名：　地域とのつながりの中で幼児が育つ　～地域連携の見直しと工夫～

解決すべき課題：

地域の独自性を生かした教育を充実させ、幼児の体験を豊かにすることで育ちを支えたいと願っている。しかし、これまでの地域の方との交流は、イベント的なことや、一過性に終わってしまうものが多く、触れ合う楽しさもその場限りのものになることが多かった。また隣接する障がい者の事業所の方とは交流ができていないままであった。

自園の HP がないこともあり、取り組んでいることや、幼稚園教育について地域の方に知られていないという課題もあり、発信することから始めて交流の見直しや工夫を行うことにした。

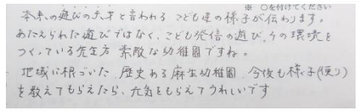
目標・方針：

１　幼児の姿だけでなく、重点的に取り組んでいること「遊びの中の学び」に視点を置いた取組を園便りで地域に発信し、コメントをもらい、連携や交流について検討する。
２　地域との交流が、幼児の豊かな経験（心の育ち）につながる工夫、実践を行う。
３　自園に隣接している障がい者の就労支援事業所と、継続的な交流、日常的な関わりができるように、職員同士の連携を深めながら、幼児と障がい者の交流を継続していく。

活動内容：

１　園通信の発信

「遊びの中の学び」に視点を置いた教育実践。事例を取りながら、環境や援助の検討を繰り返し、幼児の気付きや心の動きを発信。


本来の遊びの大事と言われる　こども達の様子が伝わります。
あたえられた遊びではなく、こども発信の遊び、今の環境をつくっている先生方　素敵な幼稚園ですね。
地域に根ざした　歴史ある麻生幼稚園　今後も様子(便り)を教えてもらえたら、元気をもらえてうれしいです

40 枚を施設や自宅に配布、30 枚の感想をいただく。地域の方に幼児教育を理解してもらうきっかけになり、「幼児がいることが地域の活力になる、応援したい」という声を受け取る。⇒　実践へ

２　交流の見直し・工夫

○　とべ動物園スタッフの来園・・・遠足に行く前に動物の話を聞くことにより、動物を見る時に注目する点や、キーパーの仕事に興味が広がる。
○　砥部焼作り体験・・・絵付けだけでなく粘土から自分の作品を作り、２度の窯焼きによる形や色の変化を知り、出来上がった喜びを感じる。地元産業の砥部焼への親しみが増す。
○　児童館訪問・・・コメントから児童館スタッフの温かい思いを知り、交流を増やす。保護者に様子を知らせることにより、家庭からの利用者も増える。

３　障がい者と幼児の交流　（取組の過程へ）

取組の過程：　障がい者と幼児の交流

『就労継続支援Ｂ型事業所』

施設の建替えをきっかけに階段のペンキ塗りに誘われたが、障がいがある方と幼児がどのように交流してよいか分からない。安全は確保できるか。保護者の理解が得られるだろうか。

・園長と施設長が話し合いを重ねる。（幼稚園職員の不安を素直に伝える）
・障がい者差別解消法等、全職員が研修を受け、障がい者について知る。
・保護者に相談すると、交流したらよいと後押しをしてもらう。
・両方の職員が話し合い、継続できる交流を計画する。　幼児期から関わることの大切さ！

～交流開始当初（R3.２月）～

Ａ児「あのおじいちゃん、幽霊みたい。手が震えよる・・」
＜衝撃的な言葉＞
そんなこと言ったらダメ！と言いそうに・・
＜教師の戸惑い＞
＜施設長に相談＞
ありのままの幼児の言葉を受け止めてい
教師「おじいちゃんはね、病気で手が震えるけど、お弁当を作る仕事してるんよ」
＜職員間で話し合い＞
疑問を感じて当たり前。幼児の純粋な気付きや発信をチャンスと捉えて、向き合う。
＜交流を重ねる＞
Ａ児「おじいちゃん、一緒に将棋しよう！」躊躇なく震える手を引っ張り部屋に招く。
＜交流が楽しみになる＞

交流の工夫

○　手作りおもちゃを持参し、物を媒介に触れ合う。
○　挨拶、散歩で覗きに行く、ちょっと声を掛けるなど、日常的な交流を大切にする。
○　様子だけでなく、幼児のつぶやきや変容を保護者に知らせる。
○　イベントに誘って一緒に楽しむ。

活動の成果：

○　定期的に園便りを通して地域に発信していくことで、自園で重点を置いて実践していることに理解が得られ、応援隊になってもらうことができた。その結果、これまでにない交流ができたり、幼児の心を動かす体験ができたりした。また、職員に励ましの言葉をもらったり、次回も見せてほしいとの声が上がったりして、教師自身の喜びや意欲につながった。幼児がいることが、地域の活力になっていることも再認識した。
○　地域のいろいろな方と結びついたことで、新たな交流だけでなく、毎年計画的に行う交流をアレンジしたり幅を広げたりするアイディアが、職員から次々出てくるようになった。
○　当初は、幼児の興味や関心が広がる程度を想像していたが、幼児自身が地域の人や物に心動かされ、自ら関わろうとする姿が見られ、様々な気付きや発見があった。幼児も教師も地域の方の温かさを実感できたことは大きい。
○　幼児期から障がいのある方と触れ合う経験は、多様な人がいることを知り、相手を理解しようとすることにつながることを実践から学んだ。大丈夫だろうかと構えるのは教師側で、幼児の柔軟な心が、障がい者との距離を縮めた。